

YMCA “Paris Basis” の日本における宣教論的意味

中道 基夫

“Paris Basis”

The Young Men's Christian Associations seek to unite those young men who, regarding Jesus Christ as their God and Saviour, according to the Holy Scriptures, desire to be his disciples in their faith and in their life, and to associate their efforts for the extension of his Kingdom amongst young men.

はじめに

1844年にロンドンでジョージ・ウィリアムスによって設立されYMCAは、ヨーロッパ、北米の域を超えて、オーストラリアやインドにまで急速に広がっていった。その一方で、それ以前にもYMCAとは名乗っていないものの、1787年にはスイスのバーゼル、1824年にはスコットランドのグラスゴー、1834年にはドイツのブレーメンにおいてYMCAに類似したキリスト教青年団体が設立されていた。これらのキリスト教青年団体が、一体となって連合体を結成しようという機運が高まり、1855年、パリに338の青年団体の中から38の青年団体を代表する99名の青年が集まり、世界YMCA同盟が結成された。多種多様なキリスト教青年団体がYMCAとして一致する基盤として採択されたのが“Paris Basis”¹である。それ以来、“Paris Basis”は世界YMCA同盟に参加を希望するYMCAの加盟審査の基準として用いられてきた。

しかしながら、“Paris Basis”が制定されて100年が過ぎた1969年のノッティンガム世界YMCA同盟総会において、“Paris Basis”の現代的意義が批判的に問われ、当時のYMCAの状況に合致し、「希望とインスピレーションを呼び起こし、新しい方向を与える」²ような新たな宣言を求める声があげられた。世界YMCA同盟はそのための特別委員会を設けた。さらに、各国の意見を集約し、全体の意見に反映させるために各ナショナルYMCAにおいても“Paris Basis”の再評価を行う特別委員会の設置が求められた。

1 “Paris Basis”は現在日本YMCA同盟では「パリ基準」と日本語に訳されているが、かつては「パリ標準」という訳語もある。その訳語の変化は“Paris Basis”の認識の違いによって生まれてくるものであるため、本論文ではその解釈に影響を及ぼされていない“Paris Basis”という英語表記を用いる。

2 日本YMCA同盟パリ標準研究特別委員会編『標準研究シリーズ 1』、1971年9月、日本YMCA同盟、1頁。

日本 YMCA 同盟も、パリ標準研究特別委員会を設置し、それまでの「パリ標準」を「パリ基準」と改称し、その再解釈と共に訳文を改め、1975年に開催された第36回日本 YMCA 同盟総会において新訳を採択した。後に詳説するが、新しい基準が作られたわけではなく、再解釈とそれに基づく訳語の修正であるが、その変更は宣教学的に大きな意味を持つものであり、日本におけるキリスト教受容の問題の一端を表すものである。そして、その訳語に見られるキリスト教理解が、40年以上経った今日においてどのような宣教論的課題を有するのかを検討するのが本論文の目的である。

“Paris Basis” は単に YMCA というキリスト教青年団体の設立に関わる理念であるだけでなく、WCCを始めとするエキュメニカルな世界宣教団体の理念の基礎となるものである。それゆえ、“Paris Basis” の見直しは YMCA 内部の問題に留まるものではなく、19世紀の後半から全世界的に展開された世界宣教運動から生まれてきた様々なキリスト教活動（教育、社会事業等）の精神的基盤を問い、その基盤としてのキリスト教の今日的な意味を問う宣教論的な課題である。

なお、“Paris Basis” に関する詳細な研究や議論は、日本 YMCA 同盟パリ標準研究特別委員会によって発行された『資料シリーズ』、ならびにその記録、YMCA の諸機関誌等に掲載された記事などがあげられる。また、フィンランドの神学者で YMCA 関係者である Martti Muukkonen がその著書 “Ecumenism of the laity : continuity and change in the mission view of the World's Alliance of Young Men's Christian Associations, 1855-1955”³ において “Paris Basis” の今日的意味について論じている。また、同著者が “Paris Basis” の Text を聖書学の文献研究の方法を用いてその成り立ちと特徴を解明した論文 “Interpretation of the Paris Basis in World YMCA Centennial Conference 1955”⁴ を著している。

1. “Paris Basis” とその問題点

上述のように世界 YMCA 同盟は、ロンドンで始められた YMCA が徐々に全世界に広まっていったというよりも、各地で展開されていたキリスト教青年運動が YMCA の名の下に集まり、結集された連合体である。その連合体を結成するために、1855年に万国博が開催されていたパリに代表者が集められた。その招請状には「お互いの協力の下に、率直に問い合い、集うものすべてが強められ、励ましを受け、啓発されることである。（中略）神の恵みによって、われわれを若々しく、喜びにあふれしめ

3 Martti Muukkonen, *Ecumenism of the laity: continuity and change in the mission view of the World's Alliance of Young Men's Christian Associations, 1855-1955*, 2002年 (<https://independent.academia.edu/MarttiMuukkonen>, 2014年12月20日現在)

4 Martti Muukkonen, *Interpretation of the Paris Basis in World YMCA Centennial Conference 1955*, 1997, (marttimuukkonen.pp.fi/pbasis.rtf, 2014年12月20日現在)

ているのがキリスト教信仰であるということ、世界の青年に示したい⁵と書かれており、YMCA は純粋に青年キリスト者の一致と協力をはかり、世界にキリスト教信仰を証ししようとする宣教的団体を目指していたことが分かる。

当時のキリスト教世界は、イエスの神性を否定する「イエス伝」に象徴されるような自由主義神学によって挑戦を受けていたが、それぞれの教派や教会の枠を越えて YMCA に集ってきた人々のキリスト教理解はむしろ福音的であった。しかしながら、同時代に信仰覚醒運動と共に設立された他の宣教団体と違って、非キリスト者をキリスト教信仰に導き、洗礼を授けることを主たる目的としていたわけではなく、またその会員もキリスト者に限られていたわけではなく、キリスト者だけによって進められていた運動でもなかった⁶。キリスト教信仰は YMCA の基盤であったが、キリスト教信仰を伝えることを第一義としているわけではなく、当時の青年たちのニーズに応えるために様々なプログラムを展開することを目的とし、キリスト教信仰はそのようなプログラムに集まってくるメンバーを一致させるものであると理解されていた⁷。

YMCA という一つの団体・一つの理念が広まり、それに賛同するものが YMCA を設立していったわけではなく、各地にあるキリスト教青年運動・活動が、YMCA に結集される形で連合体が形成されていった。そこで、“Paris Basis”の前文にあるように、設立の経緯、活動方針や内容、運動の担い手の理解が違う運動体が「それぞれの組織と行動様式の独自性を完全に保持しながら」、YMCA として「一致」することが重要な課題となり、世界 YMCA 同盟の基準、すなわち将来新たに加盟を求める団体の承認基準として“Paris Basis”が採択されたのである⁸。

この“Paris Basis”は YMCA 内部の加盟基準に留まるものではなく、この後、世界宣教、エキュメニカル運動に影響を与えるものとなっていく。

後記の一覧表⁹で比較できるように、“Paris Basis”は 1898 年には YWCA に、そし

5 日本 YMCA 同盟パリ標準研究特別委員会編『標準研究シリーズ 1』、前掲書、6 頁。

6 各国には、会員の中には様々な会員層があり、当時のドイツの「一般会員」の規定には「キリスト教の信仰に入ることを入会の条件にはしない」ということが定められており、オランダでは商人、職人、学生という会員層が設けられていた。日本 YMCA 同盟パリ標準研究特別委員会編『標準研究シリーズ 1』、前掲書、5-6 頁を参照。

7 パリ会議の報告書の序文には、「われわれは、イエス・キリストだけがわれわれの持っているこの兄弟としての一致を可能にしている源であるということ、そしてわれわれ一人一人がキリストに近づけば近づけるほど、お互いもしっかり結ばれるのだ、ということをおぼえてはならない」と書かれている。日本 YMCA 同盟パリ標準研究特別委員会編『標準研究シリーズ 1』、前掲書、7 頁を参照。

8 実際には、一つの草案を様々な訂正を経なければならなかったために、最終的な文案を決定するには時間切れとなり、不十分な形で参加者に手渡されたり、フランス語と英語の文章には若干の違いもあった。具体的には、フランス語のテキストでは“docteurin”（教義）という言葉は“foi”（信仰）に書き改められていた。また YMCA という名前に関しても、フランス語では“Union Chretienne de Jeunes Gens”となっており“gens”は男女両方を表す「人々」を意味し、「若い人々のキリスト教連合」という名であるのに対して、英語では“Young Men’s Christian Association”と「男性青年の」と男性に限定された名称になっている。Martti Muukkonen, Interpretation of the Paris Basis in World YMCA Centennial Conference 1955, 前掲書、13-14 頁を参照。

9 Martti Muukkonen, “Ecumenism of the laity: continuity and change in the mission view of the World's Alliance

て 1898 年 には WSCM (World Student Christian Movement) に、1948 年 には WCC(World Council of Churches) にも受け継がれた文書であり、現代のエキュメニカル運動の中で影響力の強い文書である。さらに、1954 年に開催された WCC のエヴァンストン第 2 回総会において、この “Paris Basis” を「信仰告白には及ばないが、他の様々な文書に優るものである」と評価されている¹⁰。

YMCA 1855 “Paris Basis”	WSCM 1895	YWCA 1898	WCC 1948
<u>The Young Men's Christian Associations seek to unite those young men</u>	The objects shall be: a) To lead students to become disciples of	The World's Young Women's Christian Association <u>seeks to unite those young women</u>	The World Council of Churches is a fellowship of churches
<u>who, regarding Jesus Christ as their God and Saviour,</u>	<u>Jesus Christ as only Saviour and as God</u>	<u>who, regarding the Lord Jesus Christ as their God and Saviour,</u>	<u>which accept our Lord Jesus Christ as God and Saviour</u>
<u>according to the Holy Scriptures,</u>		<u>according to the Holy Scriptures,</u>	
desire to be his disciples in their faith and in their life,	b) To deepen the spiritual life of students and to promote earnest study of Scriptures among them	are vitally united to him through the love of God shed abroad in their hearts by the Holy Spirit and	
<u>and to associate their efforts for the extension of his Kingdom amongst young men.</u>	c) To influence students to devote themselves to the extension of the Kingdom of God in their own nation and throughout the world	<u>desire to associate their efforts for the extension of his Kingdom among all young women</u>	

“Paris Basis” が各エキュメニカル運動に与えた影響は、想像に難しくない。WSCF は北米 YMCA のカレッジから生まれ出たものであり、YWCA は YMCA と密接な関係を持っている。1948 年にアムステルダムで開催された WCC の第 1 回総会の出席者の内おそらく 5 分の 4 は YMCA、YWCA もしくは WSCM の関係者であったであろうといわれている¹¹。

ただそれは単に人間的・組織的な連携だけが影響したわけではなく、そこにはエキュメニカル運動の共通した問題点と課題があったことがうかがえる。多種多様な背景と組織形態を持った連合体であるエキュメニカル運動にとって必要であったのは、まず、それぞれの違いを認めつつその連合の基盤となるものに基づいて「一致」するということである。それを象徴するように、YMCA や YWCA では “unite” が、WSCF では “disciples” になること、WCC では “fellowship” になることが求められて

of Young Men's Christian Associations, 1855-1955”、前掲書、145 頁を参照。

10 同書、20 頁を参照。

11 同書、19 頁を参照。

いる。

エキュメニカル運動の連合の基盤となるのが、多少表現は違っているが“according to the Holy Scriptures, regarding Jesus Christ as their God and Saviour”「聖書に基づいてイエス・キリストを神としてそして救い主として見なす」ことであり、WCCには記述されていないが、その目的となるのが“extension of his Kingdom”「神の国と拡張」である。

“Regarding Jesus Christ as their God and Saviour”「イエス・キリストを神として救い主としてみなし」という告白は、教義学の神学教授によって創案された文言ではなく、パリ大会に集まった若い信徒たちの言葉である。“Paris Basis”の起草者の1人が「キリストにおいて然りキリストにおいてのみ、われわれは青年会を打ち立てたいと欲するのである。われわれが仕え奉ろうとしているのは、十字架につけられたキリストである。人が無内容ではっきりとしない形で崇め奉るイエス・キリストではなく、真の神であり、真の人である、イエス・キリスト、我が偉大なる神、また救い主」¹²と述べたように、その内容はヨーロッパの敬虔主義や北米の信仰覚醒運動につながるものである。そして、この「無内容ではっきりとしない形で崇め奉るイエス・キリスト」という批判は、キリストを宗教的人間の理想、宗教の創始者の1人として見なしていた当時の自由主義神学に向けられたものであった。他の歴史的な信仰告白と同じように、“Paris Basis”も単なる信仰内容の要約ではなく、特定の歴史的状況の中で一つの変革を生み出すものであった。

しかしながら、パリ大会から100年が過ぎ、状況が変わり、100年前は革新的であった“Paris Basis”はむしろ伝統的なものとなり、YMCAの実状と直面する時代状況に大きな変化に対応したものとは言えなくなっていた。

1968年5月にパリでいわゆる「五月革命」がおこり、欧米を中心として学生運動が世界中に拡散した。その翌年、1969年、ノッティンガムの世界YMCA同盟総会において、参加した青年たちによって“Paris Basis”の意義が激しく問われた。“Paris Basis”は変化していく時代とニーズに対して有効なものとして、YMCA運動の“Basis”と呼ばれるものであるのか。また、そもそも“Basis”とはいったい何を意味するのか。そして、現実的な問題として、YMCA運動の担い手はもはやキリスト教の枠を越えた人々であり、その担い手は必ずしも「聖書に基づいてイエス・キリストを神として救い主として仰ぐ」キリスト者の青年であるとは言えない。それゆえ、YMCA運動の会員は人種においても、宗教においても、その信仰告白の内容においても制約されるものではないこととの整合性をどのようにつけるのかということが問題となった。その一方で、キリスト教信仰に基づいて設立され、発展して来た

12 H.R. ウェーバー『今日における信徒運動と信仰告白』、日本YMCA同盟研究所、1973年、8頁。

YMCA 運動から “Paris Basis” で言われているようなキリスト教的な要素を取り除いてしまうならば、YMCA の本質を見失ってしまうことになるという意見も主張された。

“Paris Basis” がこのまま YMCA の基盤として残されるとしても、後述するように、日本 YMCA 同盟においても問題となった2つの点「イエス・キリストを神として救い主として仰ぎ」と「神の国を拡張する」に対して、再解釈が必要とされ、世界同盟だけではなく各諸国のローカル YMCA においても委員会を設置し、各ローカル YMCA の意見を集約するように求められた。

2. 日本における議論

日本 YMCA 同盟は “Paris Basis” との関係でいうならば、その設立以来 “Paris Basis” を意識的に捉えていたわけではなかった。1932年に改正された「日本基督教青年会同盟憲法」には “Paris Basis” は記載されていない。むしろアメリカ YMCA との関係が強かった日本 YMCA はボストン YMCA の会則にならって憲法を作成したと思われる¹³。会員資格の基準も、“Paris Basis” よりもアメリカ YMCA が導入していた “Evangelical Test”¹⁴ を採択していた。

“Paris Basis” の内容はそれほど “Evangelical Test” と大きく変わるものではないが、日本 YMCA 同盟が “Paris Basis” を意識的に捉えられたのは、第二次世界大戦後のことであった。日本 YMCA 同盟は第二次世界大戦中に当時の政府の圧力によって世界同盟を離脱する旨の通告文を送り、脱退した。戦後、1947年に再び日本 YMCA 同盟は世界 YMCA 同盟に復帰するにあたり¹⁵、世界 YMCA 同盟の要請から今一度加盟資格が問われた際に、“Paris Basis” を意識的に受け入れ、初めて “Paris Basis” を「パリ標準」として日本語に訳し、1947年8月に制定された「日本基督教青年会同盟規則」に目的条項として掲げたのである。加盟各 YMCA も “Paris Basis” を目的条項とすることを決定し、“Paris Basis” が明確に日本の YMCA の存在・活動の目的として意識された。

ノッティンガム大会の決議を経て、日本 YMCA 同盟においても当時関西学院大学神学部の教授であった松村克己を委員長とするパリ標準研究特別委員会が発足した。

13 木本茂三郎『YMCA 史ノート』、日本 YMCA 同盟出版部、1983年、282頁を参照。

14 Evangelical Test とは、地域のいずれかのプロテスタント教会に所属し、三位一体を告白し、キリストの神性を認めるかどうかを問うものであった。YMCA のアクティブなメンバーは、この Evangelical Test によって承認されるものであった。アメリカの YMCA の信仰的な一致をこの点において確認しようとしていたが、日本のキリスト者はむしろリベラルな考えを持っており、このテストを容易に受け入れていたわけではなかった。この点においてアメリカから派遣された YMCA の宣教師と日本人スタッフの間に軋轢が生じていた。Jon Thares Davidann, *A World of Crisis and Progress: The American YMCA in Japan, 1890-1930*, London, 1998, 89-94 頁を参照。

15 実際は世界同盟の計らいで、脱退・復帰ではなく、改めて加盟 YMCA としての条件を確認するという形をとった。

この委員会において、“Paris Basis”の様々な問題点、フランス語もしくは英語の原文を自らの“Paris Basis”とはしない日本のYMCAにとっては、その原意の読み直しと解釈、それに基づいた新しい訳語の決定が大きな課題となった。

委員長の松村が著した小論「パリ基準再確認の問いかけるもの」¹⁶において、松村は“Paris Basis”の問題点として特に「(1)『イエス・キリストを神として救い主として仰ぎ』という表現と、(2)『神の国を拡張する』』という2つの項目を取り上げている。

根本的な問題として、“Paris Basis”のYMCAにおける意義が問われた。委員会はこれまでの訳で「基督教青年会は…目的とする」というように訳し、これを目的条項として「パリ標準」としていたのに対して、新訳では主語を「われら」とし、互いにこの基準に基づいて「努力を結集する」ことを呼びかけるアピールと捉え「パリ基準」と改称したのである。

「パリ標準」 旧訳	「パリ基準」 新訳
基督教青年会は、聖書に基づいてイエス・キリストを神とし救主として仰ぎ、信仰と生活とをとおしてその弟子となることを望み、また青年の間に神の国を拡張するために協力することを願う青年を結合することを目的とする。	われら世界のYMCAは、イエス・キリストを聖書にしたがってわが神わが救い主と仰ぎ、信仰とその生活において彼の弟子でありたいと願う青年たちを一つとし、イエス・キリストの精神が広く青年の間に活かされるよう、その努力を結集する。

以下の2つの項目に関する日本YMCA同盟の解釈と新しい訳について検討する。

(1) 「イエス・キリストを神として救い主として仰ぎ」

この言葉は根本的にYMCAのようなキリスト教社会事業団体やキリスト教主義学校・幼稚園・保育園、キリスト教社会福祉事業に共通した問題と共に1つの神学的な問題を内包している。

まず、全世界的にYMCAにはキリスト者だけが働き、メンバーとしてその活動に参加しているわけではなく、またキリスト者以外の他宗教者やもしくは宗教そのものを持たない者がアクティブなメンバーとして参加している。このような団体においてキリスト教を基盤としつつも「信仰、年齢、性別、人種、社会的状況の違いを超えて、あらゆる人々」¹⁷を会員とする「開かれた会員制指向」¹⁸を持つことが求められている。それゆえ会員をキリスト者に限定したり、その活動の目的をキリスト教的に意義づけることは、キリスト者ではない会員を排除することとなり、事業そのものの弱体化をもたらせかねない。

15 松村克己「パリ基準再確認の問いかけるもの」、『日本YMCA研究所紀要』Vol. II, No. 2, 日本YMCA研究所、1976年、65—74頁。

17 同書、70頁。

18 同書、70頁。

さらに、神学的には「イエス・キリストを神とする」を表現に、日本 YMCA において疑義を唱えられてきた経緯がある。日本の中にある、人間が神格化され神となる宗教観と混合する表現であり、聖書の中でイエスを「神の子」とする言葉はあるが、「神」として表現する言葉は少ないことなどがその批判の理由としてあげられている¹⁹。

またフランス語の原文では、“regardant Jesus-Christ comme leur Sauveur et leur Dieu”と書かれており、“Dieu”（神）と“Sauveur”（救い主）の順番が英文のものとは逆になっている。日本のパリ標準研究特別委員会はフランス語の原文に基づいて、この言葉が本質的に意味しているのは、イエスをキリスト（救い主）と告白することにおいて初めてイエス・キリストを「神」として告白することであることを再確認している。しかしながら、委員会はフランス語の表現を採択せず、定文となっている英語の順番に従い「わが神わが救い主と仰ぎ」と表現している。この言葉の日本における解釈に基づいて、フランス語でも英語でも「彼らの神、彼らの救い主」となっているのに対して、「わが神わが救い主」と自己の主體的な信仰態度として表明し、「イエスへの信従と生活とをもって弟子たる道を歩もうとする」²⁰ 自己の決意と実践を強調している。

つまり、新しい訳では、会員をキリスト者に限定するのではなく、そのような信仰と実践への決意を持つ者が、すべての人々を YMCA 運動へと招き、促していくことを強調している。

(2) 「神の国を拡張する」

新しい訳では、英語の“the extension of his Kingdom amongst young men”は「イエス・キリストの精神が広く青年の間に活かされる」と意識がなされている。“Paris Basis”をあらたに翻訳するにあたり、「(1) 訳文は分かり易い日本語であれ (2) 原文の忠実・厳密な訳であるよりは意識が好ましいが、解釈を加えた意識は行きすぎである (3) キリスト教にとって伝統的な用語や表現は保持すべきである」²¹ という原則が適用されている。

「神の国の拡張」という表現と概念に関してはその神学的理解と宣教的実践に関する歴史的変遷が見られる。

“Paris Basis”が作られた 19 世紀半ばのヨーロッパにおいては、「神の国の拡張」は明確な意味と具体的なビジョンを持っていた。「拡張」という表現が象徴しているように、イエスの宣教によって始められた神の国をキリスト者の手によって完成させることを神の愛への応答と考えていた。これはカントの倫理主義に基づいた神の国の実

19 同書、72-73 頁を参照。

20 同書、74 頁。

21 同書、66 頁。

現に対する積極的な信仰態度であった。さらに、19世紀の教会批判として語られていた「宗教ではない、神の国だ！」という合言葉が表すように社会に変革をもたらせる具体的な力を持っていた。その「神の国の拡張」こそが人類の理想的な姿であるという、希望にあふれた具体的なイメージを持つものである。

この神の国思想が敬虔主義、またそこから派生した世界宣教と結びつくことによって、「神の国の拡張」は世界宣教を促し、世界規模の広がりをもたせた。しかし、それは純粋にキリスト教宣教の理念にとどまらず、西洋の帝国主義的發展、植民地支配と結びつき、西洋文明を世界に広めることによって人類に進歩と幸福を実現するという具体的なビジョンを提供した。それにより宣教師たちはキリスト教と植民地主義、西洋文明の伝道者として世界に拡散していくことになった。

この「神の国の拡張」への理想主義的な認識と実践が第一次世界大戦によって根本的に崩されることになる。「神の国の拡張」によって人類に進歩と理想的な社会を実現するはずであったものが、戦争をもたらす結果となり、また欧米の帝国主義、植民地支配への批判はキリスト教の世界宣教にも向けられるものとなった。この「神の国の拡張」は第二次世界大戦において決定的なダメージを受けるものとなり、理想的な神の国建設はむしろ世界の破壊をもたらすものであったという認識に至ることになる。

ノッティンガムの世界大会における“Paris Basis”に対する批判も欧米中心主義とそれによってもたらされた2つの大戦への批判から出てきたものであり、これまでの価値観や権力を否定する学生運動を背景に持つものである。宣教論においては、19世紀の啓蒙主義的な宣教理解への挑戦がなされ、ボッシュがいう宣教の「ポストモダン・パラダイム」²²が主張されるようになり、YMCAもその例外ではなかった。

キリスト者が1%ほどの少数派である日本においては、「神の国」は聞き慣れない言葉であると共に、一般的には理解できない言葉である。むしろ「八紘一字」のように天皇制家族国家としての「神の国」によるアジア諸国の統一とその幸福の実現として理解される可能性も持つ。

そこで、パリ標準研究特別委員会は「神の国」という表現を避け、“the extension of his Kingdom amongst young men”を「イエス・キリストの精神が広く青年の間に活かされる」と訳した。とくに“his Kingdom”を「イエス・キリストの精神」と訳することによって、イエスが聖書において主張している隣人愛や平和を創りだす働き、奉仕の精神を宗教という枠を越えて、YMCAに集う人々が共有することのできるものとして実現したいという主張がうかがえる。

22 ディビット・ボッシュ著・東京ミッション研究所訳『宣教のパラダイム転換 下』、新教出版社、2001年、165-187頁を参照。

いわゆる伝統や組織に縛られ、社会の動きに迎合する宗教組織としての「キリスト教の精神」ではなく、「イエス・キリストの精神」とすることによって、これに自由な解釈が可能となり、主体的な関与が求められるものとなった。

おわりに 「神の国」か「精神」か

“Paris Basis” は 1973 年にカンパラで開催された第 6 回世界 YMCA 同盟総会において、現代の YMCA の使命をより明確に表した「カンパラ原則」を付与することで、再び YMCA の “Basis” として認識された。

“Paris Basis” の問題は、根本的に YMCA とはいったい何なのか、その根幹をなす YMCA のキリスト教とはいったい何なのかが本質的に問われる問いである。ただし、この課題は、YMCA の問題に留まるだけではなく、かつては宣教活動や教会との結びつきが密接であり、宣教団体や教会の資金によって設立されたキリスト教主義学校や幼稚園、保育園、社会福祉事業、様々な社会的活動となるセンターにおけるキリスト教に関連する問題でもある。現代においては、多くの機関や活動が「キリスト教」や「神の国」という言葉ではなく、「キリスト教主義」「イエス・キリストの精神」もしくは「イエスの生き方」という言葉でその設立・活動理念、キリスト者である創始者の思想を表現しようとしている。「キリスト教」を広めたり、教育するのではなく、「キリスト教の考え」「キリスト教精神」に基づいて活動し、教育するというこれらの表現は、宗教という枠を越えて人々に受け入れられ、理解されるものである²³。

しかしここに 1 つの批判点がないわけではない。ポッシュの現代の宣教理解に対する 1 つの問いかけ²⁴に基づきこの点について述べたいと思う。

あまりにも神の国・支配と帝国支配、救済史と世俗史が癒着しすぎたために、宣教を世界史や社会と乖離させようとする時、世界史も社会もキリスト教を拒否し、自分たちにとって有益なイデオロギーや実践を全く独自に選定するようになった。ポッシュは、キリスト教側においても「神の国」という言葉に象徴されるような終末論的性質が宣教から抜けてしまうとき、『福音』は倫理に成り下がってしまう²⁵と 1 つの批判を述べている。“Paris Basis” の日本語新訳において「イエス・キリストの精神」と表現されたことによって人々には受け入れやすくなったものの終末論的性質は弱められた。松村自身が“Paris Basis” の解釈と新しい翻訳に関して懸念しているように、「YMCA のキリスト教がボケて見える」²⁶のはこのことに起因していると言える。

“His Kingdom” を「イエス・キリストの精神」や「主義」と訳するとき、そこには

23 関西学院はその「ミッションステートメント」に「キリスト教主義教育」を、聖隷福祉事業団はその基本理念として「キリスト教精神に基づく『隣人愛』」をかかげている。

24 同書、421-426 頁を参照。

25 同書、422 頁。

26 松村、前掲書、70 頁。

キリスト者がすでに経験した救済史的出来事に由来する希望が弱められてしまう。YMCA のようなキリスト教運動体・事業はこの社会の問題に直面し、その解決へと取り組むものであるが、どこからその力を得、その運動や事業を推進する希望を得るのかということが問題となる。倫理化され、また理想化された「精神」や「主義」ではなく、神の完全な支配という力に導かれ、最終的勝利への確信を持たねばならない。なぜなら、その確信と希望を失うとき、運動に必要な究極の意味と目的をも失ってしまうからである。

それに対してキリスト者は、またキリスト教事業は社会の問題に直面して、その闇の中に光を創りだそうとするものではなく、「世俗史の中にも神の御手を見る」²⁷ 必要がある。それはすでに完成されたものを見るわけではない。それは見えていながらも、それは垣間見ているに過ぎないものである。

ボッシュが、「キリスト教の終末論は、過去・現在・未来へとまたがる。神の支配はすでに訪れ、訪れている最中で、しかもこれから完結する。神がすでに支配し、私たちはその支配の公的表明を待望するから、私たちは今、ここで神の国の大使となることができる」²⁸ と語るように、“Paris Basis” において「彼（イエス）の弟子になりたい」と願うならばこの終末論的な視点を失うことはできない。Missio Dei の宣教に参与し、終末論的待望のコンテクストから生じる「希望における行動」が YMCA 運動にとって必要不可欠なものである。

重要なのは、誰が YMCA のようなキリスト教団体のメンバーであるのかということではなく、いかにその事業を促進していくための力とヴィジョンを獲得し、維持していくかということである。

1970 年以降、キリスト教が「精神」「主義」という言葉によって表現されてきたことによって、キリスト教が宗教という枠を越えて一般的に受け入れられやすくなったと言える。しかし、その一方でキリスト教とは何なのか、その独自性とは何なのか分かりづらくなってしまったのではないだろうか。“Paris Basis” の日本語訳の見直しを求めるものではないが、YMCA のようなキリスト教運動体がその本来の使命に立ち返り、現代社会における存在意義を示すために、本来持っていた終末論的希望を再認識する必要がある。

27 ボッシュ、前掲書、424 頁。

28 同書、424 頁。